

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時

照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色

色即是空 空即是色 受想行識亦復如是

舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨

不增不減 是故空中

無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意

無色聲香味觸法 無眼界 乃至無意識界

無無明亦 無無明盡

乃至無老死 亦無老死盡

無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故

菩提薩埵 依般若波羅蜜多故

心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想

究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多故

得阿耨多羅三藐三菩提 故知般若波羅蜜多

是大神咒 是大明咒 是無上咒 是無等等咒

能除一切苦 眞實不虛 故説般若波羅蜜多咒

即説咒曰

羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦

菩提薩婆訶

般若心經

聖觀自在菩薩 尋常ならざる般若波羅蜜の行を行せしとき、

一切の存在は五蘊の収集にしかじ、さらにそれ自体もまた自性空也と喝破せり。

「この究竟に來たれば、シャリーのすゝ、存在するものが空性であることを觀る。すなわち空であるといひつゝ何かたち
のあらわれであり、存在者が空性の義を做すのである。

かゝる觀し、一切を盡すとなすがための咒を説いて曰く「

脱自や 到彼岸や 清爽あり 究竟凌駕し無限たり 一切解脱 万歳成就

海に蕭然と降っていた。

背を壁に擦るよう蟹歩きしなければすれ違つさえかなわぬ狭さ、路地裏というよりは石造りの垂直の壁と壁とに生まれる隙のようであつた。古い街だから足下も磨耗した石段である。晴天であつてさえ日の差さぬ、なお濡れて寂としていた。

その尖、段を降りた場所は開けた石敷であつた。甃を十数歩か行くと低い石塀がある。向こうには広大な空間があり、海が眺められた。高所からの眺望が波を無数の細緻な線彫りのように見せている。ここで見る限りは石積みの反対側が海に直下する絶壁であるかのようにしか映らない。

むろん事實は異なる。石段を下りて開けた場所とは、城壁上部の通路なのだが、実際にそこまで行つてみて胸壁の上から身を乗り出し、下方を眺めたならば同じ形をした城壁がまだいくつあつて、それぞれの上に同様の街が載つており、市街全体が段状をなして波止場まで急降下するジェットコースターのように続いているのが解せるのである。

幾千年かの間になされた先人の工夫であつた。湾岸が岩の多い急斜であるため、壁を設けて段と做し、防備と同時に角度の緩和とを計りながら、いつしかそれが数を増し、拡張され、城砦のごとく築かれた都市の様相をなしたのである。

当然、僕にはわかり切つたことだつた。だから石段を降りはしない。一瞥し、それで終わりであつた。しかしやはり不思議の感を抱くのである。

ちょうど僕は城壁より少し高い位置で壁と平行するよう緩やかに湾曲した、第四の城壁の上にある街区の大通りにいた。そしてわかり切りながらも、いまだ直下が海であるかのような錯覚に捉えられている。

遠望する海が、狭まつて建てられた家屋のために縦に仕切られ、水平線をせり上げられているように映っていることが、眩暈を助長させるせいもあつた。そして遠くを灰色に茫漠とさせながらも海が、確固として存在していることもまたそのような感覚の攪乱の一因であつた。

正反を振り向く。建物の石壁がなす峽、その奥には第五の城壁が雨雲に向かつて峻屹している。第六、第七の城壁よりか尖には聳えるガラスの破片のような抱雪の偉谷、シムノ山があつた。

類髭と鬘のような髪を靡かせる、大柄でたくましく太った、獅子のような眼の男が吼える。

「麦1デナウムは6セント、5デナウムが27セント。12デナウムなら50セントさあ。オリブ1パウンドで5セント」

市場は喧騒、雑多な色彩のようであった。第四街区は三と八の日に市が開かれるのである。^{スーク} 寒も世間の活気を殺ぐことは不可能であった。

どこであつらえたか島人には似合わぬツイードの上着に口髭の片眼鏡が講釈する。

「だがね、考えてもみてくれたまえ、ルビーよりか高価なアコプリオ（島の特産の子羊肉。塩分を多量に含んだ土壌の草を食むため、滋味に富んでいる。草地在らないため、稀少）が1ギネウムで12セントなんだ」

僕は聞こえぬかのように割って入り、たまたまたとえに挙げられていたアコプリオ羊肉を納品する。車の使いぬ場所への運搬が仕事だからだ。僕らの賃金がロバより安いため需要は多い（島ではいまだにロバが重要な運送手段なのである）。難民遺児救済補助金とこれとが全収入であつたが、非課税だし、現物支給の対象者でもあるので十七歳でもゆとりがある。人口20万（実際は常時その三倍の人間が島の上にいる）、産油国よりも利益を生む世界最大の貿易都市ならではあるが、国が豊かだから国民生活に反映するとは限らない。民に手厚くするには事情があつた。

「ファッジオさんが督促していましたよ。支払いは先週のはずです」

僕がいうと男が応える。

「払うぶんには褒めやしないが、たまに遅れりや人殺しみたいに騒ぎやがる、へん！ いってやってくれ、いくら催促したってまたテロがありや、俺たちの蓄えなんてすぐ吹っ飛んじまうんだ。がめつくなよ、ってな」

務めを果たしたので背を向けて僕は歩き出した。彼がいうのももつともだが、ファッジオさんが間違っているわけでもない。どうしてみんなこんなにくさくさいんだ？ 死んじまえばよ、って気分だ。僕には奴らがわざとゴタゴタにしていると思えない。

肩を押され、ぶつけられ、踵を踏まれる。指を二本、四本と立てて頻りに値切る客、大袈裟に首を振って声を荒げる店主、眼を剥き顎を突き出している姿が僕には時間の止静した異様な世界のように映えていた。

混雑を押し分けて人の少ない場所、建物の角にある壁龕風の小さな噴水のふちに坐る。良心的な配慮からそのスペースは空けられていたのだ。ささやかな善意もある。だから余

計めんどうだ。ソドムとゴモラを滅ぼせる者は申しかない。

ポケットから携帯端末 Air-Hyp（二つ折りタイプ、電話機能有り）を開く。ディスプレイに着信の表示なし。メール受信の表示もない。webに接続した。天候情報を確認する。雲の移動を示すシミュレーション動画を眺め、それからTVに切り替えた。天気予報番組をチェックするためである。余分なことだが他になにをすればよい？

続いて番号をプッシュした。

「インディ・パーリム（偉大なるパーリよ）の意。彼も同じくパーリ人なのだ！ 元気が、イタル^{イタル}」。

いま荷下ろしが終わったばかりさ、コンテナから荷車で商館（彼のいう商館は刃渡具氏^{ハミオウグ}の商館のこと、第二壁の区劃にある。人力で荷車を運ぶには大変だが、自走式小型運搬機が入れない場所が多いし、さきにもいったように僕らの賃金は廉価である）まで運んだのさ。おまえはどうしている？」

ハミオウグの音が鼓膜をドラミングする。寒さを吹き飛ばそうとしているのか。

「こつちも終わったよ。シエスタはどうするんだい？」

仕事は大概午前中に終わる。この島のスタイルだ。「労働は（魂を）傷つける」、それが道徳であった。

「なにもない。いつもどおりさ」。

だがよ、ちくしょう、ばかに冷えやがるな、この雨。アルカサバの四月だぜ。なあ、デ・ポリンの店でいわしのサンドイッチでも喰らおう。昨日の水揚げは今季最高だったらしい。炒り立てのマグノ産珈琲が飲みたいぜ」

島の雨季は十一月以降に來るのが普通だ。二月になると今度は北大陸^{ノルデ}から強烈な大寒気が数千キロの大洋を衰えもせずに南下し、亜熱帯の緯度にありながら、雪降ることさえあった。ただし基本的に寒波は非常に乾燥していて、ふだんから水を蓄えぬ、乾燥した石灰岩質の滋味なき島の低層部では丈の低い草や灌木の類しか生えない。

オイルを充分染み込ませた、海軍払い下げの中古着の襟を寄せた。見上げる。

「やってらんないね」

独りごちたが、なにかに対していったのではなかった。雨は好きだし、特にこの雨の風情は気に入っている。

『海の城砦』は非情の趣を持っていた。

南方系の特徴を持った砂岩色のアパートは平屋根で二十世紀以上も前のもの、比較的新

しくとも五百年前、飾り壁のあるファサードに暖色系の石葺屋根を持った商館などがそれだ。北方様式建築は花崗岩（日照があれば銀光する）や沈鬱に思ふんだ玄武岩などを外壁に持つ官舎や企業に多い。

どれもが濡れ、色を濃くしていた。こんな日は島に生まれた者であっても、そこに人の普通の生活があるのを不思議に感じる。石の存在が、晒され剥奪された、遺跡として唐突に飛び上がるかのように見えるからだ。

島は裂大陸大中央洋にあった。南大陸と北大陸とを裂くようにし、広がる海の中央にあることが運命を決していた。

古代より海上貿易の最良中継地として占領と虐殺、興亡を繰り返し、数多民族が来て去った城砦の街。アルカサバという名は文字どおり砦であつたから附された名であると実しやかにいわれるが、事実ここが砦であつた時代があり、いまでも城砦と喻えられ、その機能を有するが、語源は翼を意味するアルスから転訛したものである。

さてどの経路で待ち合わせ場所まで行くか考えながら見回す周囲は、タープを張つた露店、大きなパラソルを差しただけの魚売り、雨音を立てるブリキ天井の屋台、屋根付き荷車をそのまま店舗にしたものの、さらにその背景には中が迷路のような大アーケードがあり、そこでは雨風への心慮もなく、さまざまな店が詰まつていた。

地図片手の観光客などよく道に迷うが、地元の間人だつて歩き慣れぬ場所に来れば戸惑うことは珍しくはない。島の産でない僕が逡巡するも道理であつた。

いやそれにしてもあの鬚を蓄えた男、ダイアデムかぶりものに細長い薄手のリボンを取りつけ、房飾りのついた長いシヨールに全身をくるみ、裕福そうだが、ターバンを巻いて路面にしやがんだ金細工商と談笑しているかのように値切り交渉する表情が肉厚の頬をたっぷりと持ち上げ、到底妻や娘への贈り物を探しているとは思えない。

眼を転じた。

カンデユス

貫頭衣に紐締めできらびやかな襷を演出した男、スークへ来ながら、物色する素振りさえなく、一切を睥睨するかのよう、倣岸な態度でカールさせた太り鬚を仰け反らせている。傘も防水衣もなく、濡れるもかまわず、ペンと巻紙を持つているその様子は、詩人か。

傘のない買い物客なら大抵、アーケードの下に入る。それが常識ではあるが、早朝から降っていたのに、あの人たちはなぜ雨具を（たとえどんなに貧乏であっても、なんらかの手立てがあるものだ）携えて来なかったのか、それもまた不思議ではある。

薄さ5ミリ、軽さ38グラムを二つ折りにし、ジーンズのヒップ・ポケットに差した。僕はともかく歩き出す。

片留チ^{キトシ}ユニック^{フイブラ}の上に留金具を使い、肩で留めた短外套を羽織った革サンダルの若者が頻りに携帯端末の受話器に訴えている姿を眼にして、自分の手にある奴をしまいたくなつたのだ。顔を背けた途端、円柱に寄りかかつて紐で髻^{ヒマティオン}を結び、キトンの上に手織の長方外套を肩留めで巻いた女性が欠伸をした拍子にデジタル・ミュージック・プレイヤーのイヤホンを耳から外してしまう瞬間を眼にする。

僕は噴水を離れ、再び揉まれ歩き出す。

ジャッカルのような顔の褐色の小男がフード附雨外套で群集の傘の下をくぐるものだから他人の服を濡らしてしまい、怒鳴られている。なにを好んでか、藁蓑に笠をかぶる者がいた。豪華な刺繍飾り付きの大きなパラソルを従者に持たせる者、粗末なユニックの胸をはだけて濡れるもかまわずに声を張り上げ、自慢の干し魚を叩く者、大きなフェルト製の帽子や麦藁帽や肩までの頭巾を目深くかぶる者ら。

先ほどとは異なる脇道から再び見下ろせば霽降る海はまったく同様であつた。海拔百数十mから見る線彫りのような波とともに。

異なるところといえば二艘の超高速大型貨物船が遠くに見えていることか。なおこちらの世界では航空機一切が一部超大国の最先鋭兵器として発達した他はまったく実用化されていない。それでも大型客船などが南北の両大陸からの約二千kmの距離を10時間で来る。ジェット旅客機には相当劣るが、それほど不便とも思わない。ちなみに観光客は年々増大の一途である。

政情が比較的安定してきた証拠か、お陰でテーマパークのようだと揶揄されたりするが、古い街並みや狭い日の射さぬ石敷の路、峻厳な胸壁や堡壘などが余りにも古代叙事詩の舞台装置じみているからであらう。僕だつてそう感じる。耳を聳する日常的な活気の中にいるといつも、帰つてそれが静止した瞬間のように感じられるものだ。歩き去る僕には雑多な人々が僕を廻るメリーゴーランドのように見えていた。

筒型^{ダルマティカ}長衣に絹地に金糸の施されたバンダメントウムを羽織、ブーツを履いた貴人は日傘を差して人込みも気にせずに細長いパイプ・タバコを悠々と喫していた。

樵木の灰と山羊の脂肪とを混ぜた染料で染めた赤髪に、革の長ズボンを穿いて両腕や胸が刺青だらけの山岳人が剣を突いて立っている。嬰兒の泣き声。金や琥珀や黒曜石の腕輪をし、両肩から吊るして踝までを覆う筒型のカラシリスを身につけた優雅な婦人のすまし

顔。

冷静に、かつ真摯に現実を閲覧すれば、唐突に、この場所に投げ込まれたかのような観を覚える。

試飲をし、気取って眼を細め、蕚蓄を垂れる口髭。親指をくわえたことも。黒絹飾りの打紐を施し、子羊皮で作られたシャツでおしゃれを決め込み、上機嫌の太った赤ら顔の農夫が頻りに連れの若い男に話しかけている。

僕がなにかを考えるよりまず先に世界が構築され、僕は条飾りクラウイを縫いつけた巻衣トーガを引きずりながら歩く初老の男性を既に眺めていたりするのである。

ベルトに吊るしたケトル・ドラムを叩く芸人。トゥルチ風琴を奏でたり、マラタン太鼓やシンバルを鳴らしたりする楽人。白布帽サリクをかぶった学者。金糸刺繍のラシャ衣装を着た商人の布袋腹にぶつかってしまった赤や青の美しい文様の綴れ織を着た農婦の豊饒なる腰貂の毛皮に黒いビロードのクチュマ帽をかぶり、庶民を睥睨するかのまなざしがやや神経質そうな高官の隣には薔薇色の縐子のドレスに勾玉模様の入ったカシミア・ショールの夫人が傘を持ったお供を従え歩いているも、カフタン着で長い顎鬚にターバンを巻いた痩身の老人やら、儀礼的な皮鎧を着た髯なしの軍人やら、金属の甲冑に口髭、ピアスをした快濶な騎士、ドロット・タイプムクスデールのいく重にも重なったカフスを垂らす婦人やら、幅広カフスの軍服が濃紺に金モールである。

袖なしチュニックシクラスにボタン留め脚絆の羊飼いが左右を不安げに見回し、腰布だけの船人夫らが荷を投げるように運び、咆哮し、一切の色彩、形態、動き、その一瞬であることが奇跡であるかのように観ぜられる。

だから僕はシガリロに火を点じた。ライターの炎が揺らぐ。シガリロを支えていた左腕を下ろす刹那に秒針が眼に止まる。百合の紋章のようなその尖端の形状はマストと錨とをデザイン化したものだ。何者でもなかった。同じ腕にしているブレスレットには銀製の文字があった。

smells

と象られた金属片が溶接され、手首を廻るだけだ。古代インドの神聖サンスクリット文字だが、サンスクリット語としても意味をなしていない。そもそもこの世界にインドもサンスクリット文化もなかった。

羅列にすぎないが、彼らになんの罪があるう。

見渡せば同じよう、並んださまざまな産物たちが網膜中心窩に異様に映えている。

剥かれたように開かれた麻袋がいく百も並び、ナッツの類があふれ、タープの張られた屋台の棚にはオレンジや無花果や葡萄などがいく段にもつまれ、トマトや瓜やさまざまな野菜、魚介類が箆に山盛り、豚肉の腸詰が吊るされ、その耳がいくつも重ね置かれ、干し肉や鶏の焙り焼きが所狭し、またそちらこちらでは珈琲が炒られ、色鮮やかな香辛料が鉄製の皿に盛られていた。一人の少女が歩いている。頭巾をかぶった顔は寒さに白く、震えているかのように唇が赤かった。人と人との狭間を縫ってようやく進んでいる。僕は想起するたびに彼女の歩く姿が、古い映写機の疵だらけのモノクロ・フィルムの画像上に強引に合成されたカラー動画となつて泛ぶ。

俯き歩いていた彼女は唐突に双眸を上げた。僕の視線がそれに触れた。そのまなざし。僕は射抜かれたようにも感じた。

青い眸だった。

紺碧にも見えた。だがそこに紫藍が湛えられていた。しかし本質は蒼なのだ。白熱に熾えるようなフレンチ・ブルー。教会で見る碧玉色のステンドグラス。いや、濃紺か。むしろ翠というべきか。敢えてただの真青というべきか。

思い出すことに思い込みが附加される。それが人間の浅ましさを。素敵だ。

孔雀石の模様が揺れ動くのような、それ独自で生命を持つかの燦めきが異様にリアルだった。ヴィヴィッドであつた。アイデアを剥奪し、リアリティで虐殺する、過剰に純粋度の空気を、真の空、それが真実という言葉に実存的な意義を付与する。

まるで海。モザイクのように輝いている。瞳孔を囲む虹彩が薔薇窓の様式のような。海は深く、一片の紫藍の下には碧玉色が、その下に濃紺を湛え、その奥に翠と群青とが、奥の奥には蒼と重なる青が、コバルト・ブルーを燐火のように宿し、燐火の真央に紺碧が烟き、その真奥に燦然たる黄金光を放つ、深き真紺青の *Lapis-lazuli* (ラピスラズリ) の聖火がある。

エクスタシス
脱 自 だ。そう直感した。僕の経験を語るにはその言葉しかない。そうとしか思えなかった。

彼女は再び眼を伏せて歩く。なにも起こらない。

だが僕は走った。彼女を追った。

スークの外れにあるパン屋で止まった。

「1コペイカ（4分の1セイント）あります。今日は譲ってください」

パン屋の親父は痩せた、大きな赤い鼻の老人だった。胡麻を振ったパンのような鼻だ。

「お嬢ちゃん、仕方ないな。1斤は2コペイカだよ。いいさ、わかったよ、それならこれで」

すると遠くからおかみさんが登場。お約束の田舎に居た。

「ちよっとお待ちよ、あんた。またそれかい。いいかげんにおしよ、若い子を見るとすぐこれだ」

僕はポケットの小銭を探っていた。老人は大袈裟なくらい不機嫌になる。

「君いったって、おまえ、ほんのお嬢ちゃんじゃないか」

彼女の脇から手を伸ばし、2コペイカ銅貨を手に載せる。怪訝の表情で振り向かれた。そのまなざしには猜疑の情が読める。そうさ、田舎に居る。君の見込みどおりさ。素敵だらう？

『どういうつもりなの』

「世智辛い世の中だが、親切な若者がここに独りいる。そして人助けがしたくなった。気がすまないなら、いつか返してくれ」

「結構です。お金をいただくいわれはないわ」

「ねえ、君。金銭をあの世に持つていくことはできない。道徳は魂に積むことができる。自浄其意さ。別に君を口説こうとしているわけじゃない」

「そんなことしていないでしょう。ともかくお金はいただけません。ただそれだけよ」

老人が口をはさんだ。

「お若いの、まあ、それぐらいでいいじゃないか。君の気持ちは気持ちとして、それ、功德を積むというなら、老い先短いこの年寄りにやらせてもらえんか」

「あんた、まったく、いいかげんにおしよ、こんな縁もゆかりもない小娘に。まあ、それぐらいなら、普段から孫娘のアリナに鮎菓子の一つ二つも買ってやれようじゃないか」

「おまえは強欲だ。アリナにやなあ、いや、エレンの旦那は大法官の一等書記官じゃわ。なにが、むしろ風情のくれるもんがあるもんかい」

「よりによってあたしが強欲だって。いったい、この店切り回すのに毎日どれだけ苦労してやりくりしていると思っているんだい。だってそうだろうが。甲斐性なしのあんたに任せた日にゃ」

僕は彼女の肩を引っ張りながら銅貨を置いたまま、パンをつかんだ。

「さあ、行くうよ。夫婦和合の邪魔をしちゃいけない」

噴水広場のところまで来て、パンを押し付けた。だが受け取ってくれない。

「さあ、もういいだろう。持っていけよ」

彼女は黙って僕をにらんでいる。凜とした青い双眸。紺碧の薔薇窓。

「受け取れないわ」

1コペイカを握ったまま店に戻ろうとする。

「わかったよ、じゃあ、僕と食事してくれ。これから友達と昼飯の予定なんだ。それが僕の受け取る報酬、つてことだよ」

「いやよ」

「ねえ、失礼ない方かもしれないけれど、僕は君に興味はない。君の二つの眸に興味があるだけだ。それを少し見つめさせて、考えさせてくれ」

「なに、それ。やめてよ。気持わるいわ」

「だろうね。だから別に口説いているわけじゃないんだ。真実をいつているだけさ」

「そう。じゃあね。私、急がなくちゃいけないの」

「僕は、イ多」

「あなたに私が名乗る必要はないでしょう。その名前もいまずぐ忘れることにするわ。じやあね」

「ちえ」

僕は肩を竦めた。それきり彼女とは会っていない。今でも忘れられない。きつともう会えないのかもしれない。

